

演劇評論家・村井健氏が「モノ語り◇水仙月の四日」初演をご覧になって、ご自身のブログ「村井健が行く」に書いて下さった文章があります。この文章を励みに再演を待ち望み、今日におよんでおります。この2年間は、日露演劇会議の中心人物である村井健氏の道筋によるロシア・オムスクでの公演に始まり、ロシア、東欧での海外公演に励みました。そのロシアでの経験を生かし再演のご報告ができること、楽しみにしておりました。しかし、あまりに無念なことに、10月5日、69歳の若さで永眠されてしまいました。間に合わなかった申し訳なさと、尽きせぬ感謝を込めて、ブログの文章を記載させていただきます。ご拝読くださいませ。

### 「村井健が行く」祈りの舞台「水仙月の四日」 2012/3/17(土) 午前 1:01

昨日、ケンさんはとてもいいものを見た。『モノ語り◇水仙月の四日』

第3回人形劇祭「inochi」のオープニング作品。人形使い黒谷都の創作人形劇だ。

タイトルからも分かるように、元になっているのは宮沢賢治の「水仙月の四日」と「ガドルフの百合」。人形と舞踏と音楽が一体になった生と死と再生の物語である。せりふはない。

白を基調にした美術と衣裳。舞台にみなぎるのは静謐と清浄の気配。

シンプルで奥深い感動を呼び起こす舞台だった。

時間にすればわずか1時間半。

雪に覆われ死に行く少年の見る夢が、

「ああ、人は死ぬ時に、かくも幸福な夢を見るものか」

「ぜひともそうあってほしいものだ」と、我知らず見とれ、心打たれた。

さらには、精霊たちの舞と再生。

無言の動きと人形の作り出す祈りの舞台を見て、まず思ったのは、「もったいなさ」である。

世界の人形劇を見たケンさんにしても、これは明らかに世界水準の舞台。

なのに上演期間はわずか3日。それも京王線仙川の小さな「せんがわ劇場」での上演だ。

見る人の数は限られている。

もちろん、評論家や新聞記者は来ていない。もったいない！そして腹が立つ。

ケンさんは、終演後、思わずはるか彼方「月の都」に住まう「カグヤ」にメールした。

「あたら夜の 月と花とを 同じくは あはれ知れらむ 人に見せばや」

と思ったのである。

ナム。

村井健ブログ「村井健が行く」より転載 [http://blogs.yahoo.co.jp/pu\\_sikin/](http://blogs.yahoo.co.jp/pu_sikin/)